

## ■ 市場とFRBの間の溝は徐々に解消へ

今週は、21日に米10年債利回りが一時3.95%まで上昇する場面があった。先週発表された米国のインフレ指標や小売売上高の結果を受けて、米連邦準備理事会（FRB）が予想以上にタカ派寄りの政策を続けるとの懸念が強まったことに因るが、翌22日に公表された前回開催分の米連邦公開市場委員会（FOMC）議事録の内容を受けて、ひとまず市場の過度な懸念は和らいだ模様。22日、23日の米10年債利回りは低下した。

市場が「年内利下げ実施の可能性」まで織り込みにかかった一頃の見立てを修正し、FRBとの間で深まっていた溝が徐々に解消されてきているといった感もある。その意味からすれば、ドルは一頃よりも底堅く推移する可能性が高まっているとも言え、実際、2月に入ってからユーロ/ドルは調整色がやや色濃い展開となっている。

欧州中央銀行（ECB）が足元でタカ派姿勢を強めていることを重々承知しながらも、最近FRBのタカ派姿勢もあらためて織り込もうとしている感じ。結果、ユーロ/ドルは昨年9月安値から2月初旬につけた高値までの上げに対する23.6%押しの水準を下抜け、当面は38.2%押しの水準である1.0460ドル処を試す可能性があると思われる。

ただ、週足で見た場合のユーロ/ドルには62週移動平均線（62週線）が下値サポート



として機能しており、同線は下向きで推移しているものの当面の下値は自ずと限られると見ることもできそうである。

左図で見てもわかる通り、ユーロ/ドルにとって62週線はかなり重要な節目の一つとして意識されやすい。

既知のとおり、本日は1月の米PCEコアデフレーター<sup>①</sup>の発表が控えており、米インフレの鈍化をあらためて指し示すような結果が得られた場合には、あら

ためてユーロ買い・ドル売りの動きが強まる可能性もあるということも心得ておきたい。

なお、本日は衆議院議院運営委員会において日銀の次期正副総裁候補に対する所信聴取と質疑応答が行われており、本稿執筆中も総裁候補である植田和男氏の発言が次々に飛び込んできている。

これまで想定されていた通り、植田氏は「現在の金融政策は適切」との考えをベースに「出口戦略は時期尚早」、「2月のデータからインフレ率は大幅に下がる（1月がピーク）」などと発言しており、日本株市場はこれを大いに好感した反応となっている。

ドル/円は多少動意づいているものの、執筆時においては134-135円のレンジ内での推移となっており、かなり落ち着いた相場つきとなっている。少なくとも、当面は円の上値も限られると考えられ、なおドル/円については一目均衡表の週足「雲」上限や62週線が下値を支えやすいと見られる。

前回更新分でも述べたが、足元では日足「雲」上限に接近する動きとなっており、数日以内に日足「雲」上抜けとなる可能性も十分にある。その場合、昨年11月下旬に日足「雲」を下抜け、三役暗転（陰転）となって以来の『三役好転』を目の当たりすることとなり、テクニカル的には強気ムードが強まる。勢い、昨年10月高値から今年1月安値までの下げ幅に対する38.2%戻し=136.60円-70円処を試す可能性もあるものと引き続き見ておきたい。

(02月24日 11:00)